

# 47

2017. WINTER



# NITTAIDAI

スポーツの多様性。障がい者教育、パラスポーツ、女子競技、あらゆる垣根を超えて、日体大の挑戦は続く。





## スポーツの多様性

▷2017年が始まった。世界の動きが慌ただしくなる中で、「共生」「共栄」がいつそう声高に叫ばれている。このことに、スポーツほど大きく貢献するものはないだろう。  
▷本学では今春、北海道網走市に日本体育大学附属高等支援学校を開校する。体育・スポーツを通じた障がい者教育における貢献として他に例を見ない先駆的となる挑戦だ。

▷また、今号ではパラ・アスリートとして活躍する辻選手と本堂選手が競技にかける思いや抱負を力強く語ってくれた。女子駅伝の米田監督・大西監督・佐藤監督へのインタビューでは、本学OBの指導力が男女を問わずあらゆる競技で普遍のものであることを再認識した。障がい者、子ども、高齢者とスポーツへの期待と関心が高まる中で、本学が貢献できる領域は無限に広がっている。新たな年を迎え、視野を広げて競技や学習に取り組みたい。

学報NITTAIDAI(ニッタイダイ)47号  
発行日●2017年1月23日  
発行●日本体育大学広報委員会  
TEL 03-5706-0948  
FAX 03-5706-0922  
<http://www.nittai.ac.jp/>  
制作協力●(株)図書出版

## Special Contents

03 共生社会の実現に向けた日体大の新たな挑戦  
日本体育大学附属高等支援学校、2017年4月開校

05 Next is us スポーツの多様性

女子パラアスリートインタビュー

辻 沙絵 選手(リオパラリンピック陸上銅メダリスト)

本堂 杏実 選手(日本障害者スキー連盟育成指定選手)

07 女子アスリートを育てる

～女子駅伝監督が語る「指導力」「日体大の強み」「夢」～

米田 勝朗 氏(名城大学女子駅伝部監督)

大西 崇仁 氏(松山大学女子駅伝部監督)

佐藤 洋平 氏(日本体育大学女子駅伝ブロック監督)

11 活躍するOB・OG

日体大時代に磨き、鍛えた心身を武器に  
化粧品トップメーカーで「美」をセールスする

瀧口 和伸 氏

資生堂ジャパン株式会社 北日本事業部 事業部長

退園後も気軽に遊びに来てもらえる場所にしたい  
大好きな子どもたちのために「わが家」を守る

岡野 真希 氏

社会福祉法人 心泉学園

15 保健医療学部からのメッセージ

～救急災害医療における救急救命士の挑戦～

『社会に応える救急救命士の挑戦  
一人でも多くの命を救うために』

保健医療学部 救急医療学科 鈴木健介助教

17 NASSの挑戦

点ではなく連続的・包括的なサポートが強み  
メディカルサポート

19 news & topics

●125周年記念事業第2回ホームカミングデー懇親会を開催しました

●リオデジャネイロ2016祝賀会が盛大に開催されました

●平成28年度 第2回留学生交流会(日体ファミリー)が開催されました

●JICAボランティア平成28年度第三次隊派遣前訓練修了式において、法人・大学・設置校関係者22名が出席致しました

●第93回東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)総合7位  
6区秋山は2年連続区間新!



女子部のダンス(牛が淵時代)



荏原体育(昭和51年)

# Nittai Story

## 日体大と女子教育

スポーツは早くから女性が活躍してきた分野の一つである。体操、水泳といった看板競技から、今やサッカーやラグビーといった激しい戦いを見せる競技でも、女子チームが注目を集めているのは周知の通りだ。

本学やその前身においても、建学以来、女子教育に力を入れてきた。歴史をひもとくと、本学の母体である体育会創立(1891年)後、間もなく女子(遊戯)部設置(1899年)の記録が見られる。翌1900年には、女子遊戯部を女子体操遊戯講習会と改称。1903年には日本体育会体操学校女子部が開設。1923年には規則改正により男子部・女子部が一本化されたが、キャンパスを共有するまでには至らず、男女共学が社会的に認められていない時代背景が窺える。なお、女子の応援スタイルである「荏原体育」は、体操学校時代に考案され、昭和40年代に現在のスタイルとして定着したという。

オリンピックの歴史においては、池田(旧姓田中)敬子(現名誉教授)、千葉(旧姓虻川)吟子(現名誉教授)、相原(旧姓白須)俊子(現指導者)の各氏の活躍がパイオニアと言えるだろう。体操競技・団体総合に3氏が出場し、1960年のローマ大会で4位入賞、1964年の東京大会では銅メダルを獲得した。その後も、有森裕子(マラソン)、谷(旧姓田村)亮子(柔道)、高山樹里(ソフトボール)、川澄奈穂美・丸山桂里奈・近賀ゆかり(サッカー)の各氏をはじめ、女子メダリストを数多く輩出し現在に至る。

さらに、戦後の女子教員養成や女子スポーツの振興に鑑み1953年に設置された日本体育大学女子短期大学(2005年、日本体育大学女子短期大学部に改称)は、今日の児童スポーツ教育の基盤となっている。女子学生、女子アスリートの活躍は、体育・スポーツの活性化の起爆剤となるだろう。多様性が重視される時代、日体生の「女子力」に大いに期待したい。

平成29年  
4月開校

# の新たな挑戦

## 日本体育大学附属 高等支援学校（北海道網走市）

日体大の使命は、スポーツの広がりとともに、一層多様になっています。  
スポーツによって、すべての命が輝くために。

障がい者のスポーツ教育も注目される昨今、世に先駆けて設置するのが  
日本体育大学附属高等支援学校です。

スポーツ教育を基軸に、  
労作（農業）教育と情操（芸術）教育を展開し、  
地域社会で生きる力を育みます。



オホーツクの大地で  
獅子吼する！  
ししく

### スポーツ教育

体育、部活動を通して  
たくましい体と  
健やかな心を育む

### 労作教育

作業学習、  
就労実習を通して  
働くことの  
楽しさ尊さを培う

### 情操教育

芸術、ダンスなど  
様々な学習を通して  
豊かな感性を養う

国内初の  
スポーツ教育を  
主軸とした  
特別支援学校

生徒一人ひとりの  
人権を尊重しながら、  
障がいの特性に応じた  
専門的な教育を  
おこなう

寄宿舎生活を通し  
基本的な生活習慣の  
定着

体育・部活動を通し  
心身の健康を育む  
スポーツ教育

絵画、書道、  
ダンスなど教育の  
あらゆる機会を通し  
ての情操教育

網走市の特性を  
生かした労作教育  
（農業、園芸、  
流通サービス）

日本体育大学附属高等支援学校が生み出す  
自立への好循環

自然を活かし楽しく伸びやかに学べる環境



第一体育館：バスケットボールコート一  
面分の広さのアリーナ



第二体育館：トレーニング機器も完備、  
マット壁で安全配慮も



グラウンド：約5,000㎡の広々としたグラ  
ウンド



美術室：絵画や造形の授業が行われる



実習室：業務用の清掃機械を用いた実  
習が可能



調理室：パンを焼いたりピザ生地をこ  
ねる器具も

〒093-0045 北海道網走市大曲1丁目6番1号  
TEL.0152(67)9141 FAX.0152(67)9142  
<http://www.s-nittai.ed.jp>

### 「雄渾舎」と名付けられた寄宿舎



外観

ラウンジ



浴室



舎室(2人部屋)



エントランス



勉強机



洗濯室



食堂



# 共生社会の実現に向けた日体大

平成29年4月、日体ファミリーに新たな学校が誕生します。日本体育大学附属高等支援学校です。このプロジェクトが立ち上がったのは、平成24年のこと。その年の8月に網走市の水谷市長が来校され、10月に学校設立誘致の要請がありました。その後、何度も検討を重ね、幾多の困難をクリアし開校に至ったわけです。その狙いや教育の特徴、今後の展開について、今村裕学校法人日本体育大学常務理事にお話を聞きました。

学校法人日本体育大学 今村 裕 常務理事

— 設立の狙いはなんですか。また本学が設立する意義をお聞かせください。

日本体育大学は昨年創立125周年を迎えました。長い歴史のなかで体育・スポーツの指導者を養成してきました。体育・スポーツは他の科目と違い、障がい者に対して社会復帰させるための条件がそろっていると思います。そういう意味でも本学の経験と知見を最大限に活用した教育ができるかと確信しています。また、特別支援の教育を必要としている生徒が増えている現状があります。それらの社会的要求に応えるのも本学の役目であり、日本体育大学の社会貢献の一つとしても意義があると考えています。

— では、教育内容の特色を教えてください。

まず、全寮制であることです。寄宿舎は校舎に併設されているので、登下校が安全であり、さらに生徒に負担がかかりません。そのため勉強や部活動などにも集中できます。寄宿舎には指導員が常勤しているなどのサポートも万全に整えています。3年間仲間たちと寝食を共にすることで、精神的にも大きな成長が期待できますし、私たちもそうできるように全力で臨みます。

— 具体的にどのような授業が行われるのでしょうか。

教育の軸を「スポーツ」「労作」「情操」の3つに定めました。この3分野は人間づくりの重要な基礎であり、生徒の興味・関心を惹くベースになるものと考えています。その上でス

ポーツ教育では、健康で強靱な身体を形成し、ルールやマナーなど周囲とのコミュニケーション能力を養うための教育を行います。本学はトップアスリートを輩出してきましたが、トップアスリートを目指すことがスポーツの取り組み方ではありません。しかし、トップを目指し諦めず継続していく精神は大切で、つまりスポーツ教育ではこれらのルール・マナーを大事にする心、スポーツや身体に関する知識、諦めずに継続していく精神を身につけてほしいと考えています。次に労作教育は、農業やビルメンテナンス、流通サービスなどの実習を行います。社会に出れば環境の違いから戸惑ってしまうこともあるでしょう。そんなときのために自分の気持ちを表現し、周りの人とのコミュニケーションを取り社会に出たときに困らない力をつけてほしいと考えます。

そして情操教育では、日々の生活を豊かにする「感動する心」を養うことを目的とします。普段の生活でも小さな感動があります。それを気づき、表現することで人生は彩り豊かなものになるはずで、表現する手段は言葉だけではありません。絵画や造形、音楽、ダンスなどさまざまな表現方法で自分の感動を表すための教育を行います。

— 網走市とはどのような連携があるのでしょうか。

網走市とは密接な連携を取ります。まず、入学金に関して網走市が負担してくれることになっています。また、労作教育では、網走湖畔の広大な大曲湖畔園地を利用させていただき、その土地の農家の方々に協力していただくことも考えて

います。また、市内のスポーツ施設の利用をはじめ、市民の方々と交流を図っていきます。つまり網走市のすべてが学びのフィールドなのです。

また、すぐ近くには東京農業大学オホーツクキャンパスがあり、東京農大本部も同じ世田谷でもあるので、今後連携が取れるかもしれません。

— 日体大の学生は、支援学校とどのような関わりを持つことが想定されますか。

日体大も特別支援学校教諭免許を取得できる大学となりました。特別支援の免許を持った教員が十分ではない現状を完全なものにするための教育機関として、その教育実習校となります。網走での教育実習は学生にはとてもいい経験になるはずです。その意味でも大学との連携を強くしていきます。

— 今後の期待、抱負をお聞かせください。

創立125周年を迎えた日体大が障がい者の為の教育研究機関として世に先駆けて開設するのが日本体育大学附属高等支援学校です。障がいを持つ生徒のための学校であることはもちろん、永年に亘り社会に感動と夢を届けてきた日体大が、さらにこれからの社会が必要とする人材育成のために設立する画期的な教育機関でもあります。日本体育大学附属高等支援学校は人に感動を届ける共生社会への新たな挑戦でもあります。

# 大歓声を浴びて 走ることの幸せ。

## 辻 沙絵

Sae Tsuji

辻 沙絵(つじ さえ) 体育学部4年。水海道第二高校(茨城)出身。小学5年からハンドボールを始め、高校では全国高校総体ベスト8に。日体大でもハンドボール部に所属。大学2年の夏にパラリンピック種目への転向打診があり、適性検査にて瞬発力が高く評価され、陸上競技を選択。大学2年3月よりハンドボール部に所属しながら陸上競技を開始し、12月に本格的にパラリンピックでのメダル獲得を目指すためにハンドボール部から陸上競技部(パラアスリートブロック)に転向。リオパラリンピックでは陸上競技(女子T47 400m)で銅メダルを獲得するなど活躍。好きな言葉は「人との出会いを大切に、常に感謝の気持ちを持つ」「最大限の努力」。毎日つけている日記を読み返し辛かった時を思い出して原動力にしているという。



**リオデジャネイロへの挑戦**——銅メダルを獲得できたことは、素直に嬉しかったですし、挑戦してよかったと思いました。リオに来るまでにお世話になった、家族や友人、そして監督やコーチに、メダルという形を残せたことで恩返しができました。とにかく、今までとは何もかもがまったく違い、すごく緊張した大会でした。また他の選手たちがこの大舞台を目指して4年間努力を積み重ねて来ていることをあらためて実感し、陸上を始めて1年あまりで結果が残せるか不安があったことも事実です。ただ、大観衆、地響きするほどの歓声の中で、6本も走ることができてこの上ない幸せを味わいました。



**ハンドボールと陸上**——ハンドボールは団体競技。いつも周りに目を向けなければいけません。一方、一つのこと集中しなければいけないのが陸上です。その差に最初は戸惑いました。レース前に誰かの電話が鳴ると気になって苦労したこともあります。技術的には陸上はフォームやペース配分、レース展開などの感覚をつかんでいくことが必要です。集中力を高めるために、表彰台に上がるイメージを思い描いて、トレーニングでは、どれだけ良いフォームで走ることができているかを考え、意識してきました。

**日体大の支え**——日体大は、競技の高度な専門的な知識を持った監督やコーチに指導を受けることができるのももちろん、常にベストな練習環境が整っています。また、自分がどのような狙いや枠組みのもとで練習しているのか、授業を通して学べることも有意義でした。競技はもちろん、スポーツの奥深さをあらためて感じることができたと思います。

**日体女子へ**——女子の強みはやはり細かいところまで気がつくことではないでしょうか。苦業をともにしたハンドボールの仲間、そして大学2年の3月に移った陸上の仲間たちには本当に助けられました。競技に関係なく、お互いを応援し合ったり相談できる環境は、すごく刺激になっています。皆さんにも、失敗を恐れずいろいろなことに積極的に挑戦してほしいと思います。もちろん女子だけではなく、周りの仲間が必ず支えてくれるはずですよ。

**夢、抱負**——競技面では400mで金メダルを獲得すること。個人の思いとしては、私の走りが見たい、パラスポーツってこんなに面白いからチケットを買ってぜひ応援に行ってみようという方々が増えることが夢です。2020年の東京大会は、選手だけでなく、観客やスタッフの方々も含めて、日本国民全体が盛り上がる大会になってほしいと期待しています。

スポーツほど公平で、万人に開かれた営みはない。  
メダルに挑むパラ(障がい者)アスリートがいる。競技力、

# 本堂 Anmi Hondou 杏実

本堂 杏実(ほんどう あんみ) 体育学部2年。日体桜華高校(東京)出身。父親の影響で子どもの頃からラグビーボールに触れる。高校時代、国際大会「サニックスワールドラグビーユース交流大会2014」に優勝。U18関東選抜と日本選抜として活躍。日体大では、ピンクリボンカップで優勝、個人でMVPを二つ獲得。一方で、パラアスリート発掘プロジェクトの候補に挙がり、スキーでパラリンピックを目指すことになる。日本障害者スキー連盟の育成指定選手(立位クラス: LW6/8-2)に認定。自他ともに認める負けず嫌いが、オフは人形に囲まれた布団でひたすら眠ったり、ファッションサイトを見たりと女子の素顔を見せる。

## 壁は必ず 乗り越えら れる。



平昌(ピョンチャン)への挑戦——夏の1ヶ月はニュージーランド、後学期の2ヶ月はオーストラリア、オランダで、ナショナルチームの育成選手として日々練習しています。良いポイントを取ることもできるように、トレーニングや実戦などを通して、雪上、レース経験を積み重ねています。ラグビーもスキーも冬がシーズンということもあり、今後練習をどう進めていくか、まだ決めかねているところです。

選択・決意——ずっとラグビーをやってきた私かなぜスキーなのか? スキーが好きだからという以外に理由はありません。最初にパラリンピックを目指さなかった時は、自分自身を障がい者と意識していなかったですし、女子ラグビー15人制で代表を目指していたこともあ

半端と思われるかもしれませんが、今の自分にはラグビーを辞めることはできません。できることならラグビーでもスキーでもトップに立てる選手になりたいと思っています。もちろんスキーもラグビーもそんなに甘い世界ではありません。ただ、スキーをやると決めたからには中途半端にはしたくないのです。今はスキーで少しでも早くトップの選手と肩を並べられるレベルになり、近い将来表彰台に立つことのできる選手になりたいと思っています。

日体大の支え——体方面でのデータ収集や病院との連携、マテリアルの調達など、様々な場面でサポートしていただいています。より多く雪上での練習ができるのもそのおかげです。また、チームメイトやクラスメイトは心の支えになっています。辛い時や上手くいかない時に連絡をする、すぐに励ましの言葉やアドバイスを送ってくれたり、気分転換になる動画を紹介してくれて私を元気づけてくれます。

日体女子へ——私は女子も男子も基本的には変わらないと思っています。強いて言うなら女子のほうが精神面では強いでしょう。私は辛い時や苦しい時こそ将来の自分を思い浮かべ今の辛さは将来表彰台に笑顔で立つため! と思い、あと1歩、2歩踏み張って乗り越えています。壁に背を向けずに何度も何度も立ち向かっていけばやがて大きな壁を乗り越えることができ、強くなれるのではないかと思います。

夢、抱負——まずは、2018年の平昌パラリンピックに出場できるように2月、3月に行われるレースなどで少しでも上の順位に入り、しっかりと自信の持てるポイントを獲得することです。そして、平昌パラリンピックに出場し自分の持っている最大限の滑りを見せ、2022年の北京パラリンピックではメダルを獲得できる選手になりたいと思っています。



ラグビーへの思い——15年続けてい  
るラグビーをそう簡  
単には辞めることは  
できないですし、未  
練はあります。中途

強く、しなやかに、輝く

# 女子アスリートを育てる

## ～女子駅伝監督が語る「指導力」「日体大の強み」「夢」～

女子だからと言って、特別な指導法、近道はない。

競技にひたむきに取り組むブレない軸、自分自身を律する気持ちの強さ。

まさに日体大精神を女子駅伝のフィールドで伝え続ける指導者たちがいる。

米田監督を師とし、大西監督、佐藤監督の3氏は日体大OBの絆で結ばれている。

卓越した指導力に加えて、共通するのは選手の成長を願う深い愛情だ。



佐藤 洋平氏  
(日本体育大学女子駅伝ブロック監督)



大西 崇仁氏  
(松山大学女子駅伝部監督)



米田 勝朗氏  
(名城大学女子駅伝部監督)

## 高い目標を掲げ、選手の成長を願う

「女子駅伝界で活躍される各氏にお話をうかがいました。さっそくですが、それぞれの指導における「ポリシー」を聞かせてください。

**佐藤** 日本の諺(ことわざ)で「若い時の苦労は買ってでもせよ」という言葉があります。苦労することで心身ともに鍛えられて、その苦労を乗り越えることで人間は成長できます。選手たちにあえてきつい経験をさせるために、私の方から厳しい方向へ導くこともあります。そのほか指導においては、土台となる70%ぐらいまではこちらで固めるように導き、残りの30%は選手たち自身で上乘せしていく方針で行っています。

**大西** 「日本一になるためにどうするか」という目標を常に頭に置くとともに、駅伝と真正面から向き合うという軸をブレさずに指導をしています。技術的なことを言えば、短距離の動作を長距離競技である駅伝にも取り入れています。それ以上にしっかりとした価値観を持つといった精神的な部分で競技の結果に大きな影響を与えます。それがあつて初めて、突き抜ける選手になるための準備期間に入っていくのではないのでしょうか。ですから、しっかりとした価値観が持てるような働きかけを意識しています。

——興味深いアプローチですね。

**大西** 選手を続けていけば、必ず壁に当たるもので、それを乗り越えられる選手と壁の周りをグルグルと回っているだけの選手の二つに大別されます。厳しい状況に置かれた時にこそ、自分の素は出るものです。ネガティブ思考の選手はなかなか抜け出せません。一生懸命に壁を乗り越えようとトライを繰り返しながら、失敗から学んでいくことで考え方や目線が変化し、それが厳しい状況を乗り越えられる原動力となります。駅伝や陸上競技を通じて、困難を乗り越えたという「成功体験」を体感することが人生にとっても大きな価値につながります。「駅伝や陸上競技は、私にとって大き



な存在だ」と思えるようになることで選手はどんどん強くなるのです。

**米田** 私の場合は20年以上も指導者を続けているので、アプローチも変化してきました。この名城大学に来て女子駅伝部を立ち上げた時は「オレに付いてこい」という厳しい指導をしていましたが、2005年(平成17年)に全日本大学女子駅伝で日本一になった時に、次のステージを目標に掲げる必要があると考えました。その中で、日本一はもちろん大事ですが、大学卒業後に実業団でトップの選手として君臨し、世界で勝てるようなトップアスリートを育てたいという目標に次第が変わっていききました。

——つまり選手自身のさらなる成長を意識するようになったと…。

**米田** 自己管理できる、駅伝に対して取り組む姿勢を自分自身で育めるような選手を育成しようと考えたのです。こちらから答えを提示することがないように、基本的には自分で考えさせるような指導に変えてきました。今では私が求めていることを十分に理解して、高い目標を持ち、自己管理できる学生が増えています。私の仕事は、結果を出すことで自分たちがやってきたことは間違っていないと自信を付けさせることだと思っています。今年の全日本女子駅伝で3位に入るなど結果につながり、その答えが始めています。

——大西監督は実際に日本一を経験していますが、それによってご自身の中で指導に対する考え方が変わるようなことはありませんか？

**大西** キャプテンが、今年の全日本女子駅伝が始まる前に「先生を胴上げしたい」という目標を語ってくれたことがあります。それを聞いた時、目標が「日本一になる」だけではなく、「私を胴上げするために日本一にならないといけない」という段階に変わったのだと思いました。目標に付随する気持ちが出てくると真剣度が違ってきます。選手たちのそういう思いの強さが実際に10月の全日本女子駅伝初優勝につながったと思います。



強く、しなやかに、輝く

# 女子アスリートを育てる

～女子駅伝監督が語る「指導力」「日体大の強み」「夢」～

「ところで、女子アスリートと向き合うにあたって、男子を指導する場合と異なり、何か特別に心がけていることはありますか？」

**大西** お互いに素を出して向き合うことぐらいで、男子と女子でアプローチが変わったり特別に意識していることはありません。

**佐藤** 私も特別に気を遣うようなことはありませんし、言葉使いも意識をして変えているようなことはありません。とにかく全力で向き合っていますから、本気で怒ることもあります。

**米田** 私も相手が女子だからと向き合い方を変えるようなことはありません。ただ、指導者を始めてから20年以上が経つので、学生とは年齢も離れてきましたから、接しやすい女性のコーチを招聘したり、ドクターも女性の方をお願いしています。

## ライバルであり、同志である

――指導者として、日体大OBであることの強みとは何でしょうか？

**米田** 心強い先輩たちが数多くいることです。26歳の時、名城大学で女子駅伝部を創設する話が決まった際に、東海地区の指導者はほぼ相手にしてくれませんでした。その中で助けてもらったのが日体大OBの方々です。同世代だけではなく、10歳も20歳も年齢が上の先輩たちにも助けていただきました。日体大OBであることのつながりが私の大きな力となっています。

**佐藤** 私も人脈だと思えます。日体大OBが全国各地で活躍していますから、多くのことを学ぶチャンスに恵まれています。私は日体大OBの縁で、米田監督から誘っていたとき、その下で指導者として多くのことを勉強させていただきました。大西監督も名城大学女子駅伝部2代目コーチですし、松山大学で日本一を経験されています。お二人からは、指導者としての選手育成を見習いたいと思っています。  
**大西** 一度旅行会社に就職した私が、指導者の世界に入ることができたきっかけも日体大でしたし、名城大学で米田監督の下、コーチとして指導する過程で日本一も経験できました。そのご縁は間違いなく日体大OBでなければなかったと感謝しています。

――それぞれ、別のお二人のことを指導者としてどのように見ていらっしゃるのでしょうか？

**佐藤** 米田監督のことは、現役時代に主務だった経験を生かし人を束ねるマネジメントに長けた指導者だと尊敬しています。大西監督は情熱がすごいです。選手と一緒に走って、選手と一緒に悩んで、という熱血指導は見習いたいですし、私自身まだ若いので、そうならなければと思っています。

**大西** 2年間名城大学でコーチとして米田監督をサポートする中で、人をまとめ、指導する力は率直にすごいと思っていました。その土俵で戦っても勝てないと思います。また私からすれば、佐藤監督のほうが熱血漢で、愛情に基づく熱血指導をされていると思いますよ。

**大西 崇仁氏**  
(松山大学女子駅伝部監督)

## しっかりとした価値観を持ち 果敢に壁に挑む選手を育てる

1992年体育学部体育学科卒業。1995年大学院体育学研究科修了。学生時代は短距離選手として活躍。卒業後は旅行会社に勤務するなど、異色のキャリアを持つ。2005年に名城大学で米田監督とともにコーチとして指導にあたり、全日本大学女子駅伝で全国優勝を経験。06年に松山大学へと赴任し、08年から部員2名で女子駅伝部をスタートさせた。昨年10月の全日本女子駅伝では初の日本一に輝く。昨年末の富士山女子駅伝は3位。





米田 勝朗氏  
(名城大学女子駅伝部監督)

## 高い目標を持ち、実現に向け 自己管理できる選手が目標

1991年体育学部体育学科卒業。1994年大学院体育学研究科修了。学生時代は駅伝ブロックの主務として奔走。1994年に名城大学へ赴任し、翌1995年に女子駅伝部を創設した。2005年には全日本大学女子駅伝で創部以来初の日本一に輝く。近年は食事面の改革を推し進め、管理栄養士を目指す学生が集う名古屋芸芸大学のゼミ生と連携しながら、競技者としての身体作りにも工夫を施している。昨年末の富士山女子駅伝は2位。

**米田** 繰り返しになりますが、大西監督はウチで2年間、コーチを務めていたが、その中で現在の松山大学から声がかかり、「ウチではいつまでもコーチのままだから」と快く送り出しました。また佐藤監督は現役を引退した後、カネボウで仕事をする中で、「やはり現場で仕事したい」という本人の意向などがあり、5年間ウチでコーチを務めていただきました。その後はタイムミングが良く、こうして日体大女子駅伝ブロックの監督として指導されています。二人には冗談っぽく、「いまのお前があるのは誰のおかげなんだ？」なんて言うところもあるのですが、だからと言って、「ウチの後ろを走れ」とは言いませんよ(笑)

―チームとしてはお互いどのように戦っていきたくてお考えですか。

**米田** 同じ日体大OBですが勝負をする上では、ライバルです。でも、結果はどかが勝とうが、非常に喜ばしいことですし、常に高いレベルで勝負をしたいと思っています。大西監督は昨夏のリオで五輪選手(高見澤安珠選手/競技は3,000m障害)を輩出しましたから、「私も負けられない!」という気持ちを強くしていますし、刺激にもなっています。

**大西** 3人がそれぞれのカラーを出しながらこれからも勝負をしていければと思います。昨年は3大学で3位争いのデッドヒートを繰り返す大会もありましたが、3大学の優勝争いのステージへと引き上げられるように頑張っていました。いろいろな意味でお互いにそれぞれを刺激し合いながら、今後も自分の土俵で勝負をしていきたいと思っています。

―最後に、今後の展望を聞かせてください。

**佐藤** 大西監督がリオ五輪代表選手を輩出しましたので、私も大いに刺激を受けました。「次は私の番だ」という思いを強くしましたので、東京五輪では私の教え子からオリンピックを輩出したいと思っています。また個人的にはマラソンに対する憧れが日本スポーツ界の中で薄くなってきたので、マラソン選手を育成したい思いもあります。

**大西** 私も負けませんよ。私個人の思いとしては、常に日本一を目指しながら、選手ともども成長し続けることが今後の展望です。たとえ一生懸命やっていたとしても、優勝できるかどうかは、ほかの大学のほうが力が上であれば、それは叶いません。しかし、常に日本一を目指して最高の準備をしてスタートラインに立つことは、実力に関わらずできることです。最高の準備を整えることができなければ、日本一になるチャンスは生まれませんから。

**米田** 私はまだ日本一は一度しか経験したことがないので、大学のトップレベルに立つことを目指しながら、表彰台上に上がれるチームを今後も作っていきたくと思います。その一方で今後については、ウチの卒業生が実業団へ入って、そこで鍛えられることにより、世界選手権や五輪など、世界レベルの競技大会で勝てるような選手を育成していきたいと思っています。

―本日は貴重なお話の数々、ありがとうございました。



佐藤 洋平氏  
(日本体育大学女子駅伝ブロック監督)

## 人間的成長と共に 世界に通じるマラソン選手の育成

2001年体育学部体育学科卒業。学生時代は駅伝ブロックに所属し、1年生から箱根駅伝のメンバーに抜擢されるなど、ランナーの実績も豊富。ただ高校時代は実績がなかったことから、休みの日も地道に努力を重ねていた。2003年には別府大分毎日マラソンで日本人選手トップの成績(4位)を収めるなど、カネボウで活躍。現役引退後は米田監督の下でコーチを5年間務め、2013年に日体大女子駅伝部の監督に就任した。昨年末の富士山女子駅伝は5位。

# 日体大時代に磨き、鍛えた心身を武器に 化粧品トップメーカーで「美」をセールスする

トップを走り続ける使命。それはスポーツにおける日体大も、日本国内はもとより世界に展開する資生堂も変わらないと瀧口さんは話す。粘り強さ、信頼を得るための人間性など、スポーツでもビジネスでも求められる素養は当然共通だろう。数々の大きなビジネスを成功させてきた同氏の営業手腕にも日体大時代の経験が活かされている。さらに、スポーツも「美」も、人々の生き生きとした暮らしや幸せを目指すものだ。スポーツで学び経験することが、社会の幅広い場で活かせることをあらためて実感する。

## 組織小売業を顧客に 大きな商談をまとめるやりがい

日体女子の皆さん、お化粧品を楽しんでいますか？勉強や部活動で毎日忙しいと思いますが、自分のためにほんの少しでも時間を使っていただければと思います。「美」は自信につながるはずですから…。

おかげさまで、資生堂は化粧品において日本のトップメーカーとして高い認知をいただき、さらに2020年に向けて「美の総合商社」として大きく舵を切りつつあります。私は現在、ドラッグストアやGMS（いわゆる大規模な総合スーパーなど）を顧客に資生堂の商品をセールスする仕事で、北海道と東北6県の責任者を務めています。約600人の社員の生活を左右する立場ですから、仕事の重みに身が引き締まる思いをしながら、お客様や会社に貢献できるように日々努力しています。

体育系バリバリだった私が「なぜ化粧品業界に？」と思う方もいらっしゃるでしょう。思えば、日体大で培ったタフさを強みに、転機や時代の流れ、チャンスをつまみ自分のものにしてきた結果ではないかと思っています。

私が卒業した当時もやはり体育教員になるのは狭き門でした。やむなく民間就職の道を選びましたが、



活躍する

# OB

資生堂ジャパン株式会社  
北日本事業部 事業部長

瀧口 和伸氏

INTERVIEW

ちょうどバブル期で就職状況は良く、特に体育系の学生は歓迎されていました。最初に入社したのは高級フィットネスクラブを運営する資生堂ウェルネスという会社です。メディアでよく目にするような芸能人や政財界のトップの方にセールスをすることもあり、普通ではできない貴重な経験をさせていただきました。その後、時代の変化とともにフィットネスクラブ事業が撤退することになり、私は幸いに資生堂に移ることができ、化粧品業界で仕事をするようになったのです。

化粧品というかつては専門店のイメージがありましたが、今はドラッグストアやGMSへのセールスに力を入れています。いわゆる組織小売業は、企業によっては何百という店舗を持っています。一回の商談で何万個、何百・何千万円の売上となることもあります。もちろん簡単な仕事ではありませんが、やはり日体大で培った粘り強さや忍耐力が仕事において強みになっているのは間違いありません。

今の目標は、担当する北海道・東北6県のエリアで、資生堂の商品を通して「美人」をいっそう増やしていくことです。前任地の茨城県もそうですが、震災の被害を受けた地域。元氣美人、笑顔美人であふれるエリアにしていきたいと思っています。

## “からジャン”や倒立で 忍耐力やチームワークを養う

日体大に入学したのは体育教員になりたかったから。中学校時代の恩師が当時やんちゃをしていた私に教員になることを勧めてくれたのがきっかけです。高校時代まで野球をしていたので、高校野球の監督になって、甲子園に行くのが夢でした。

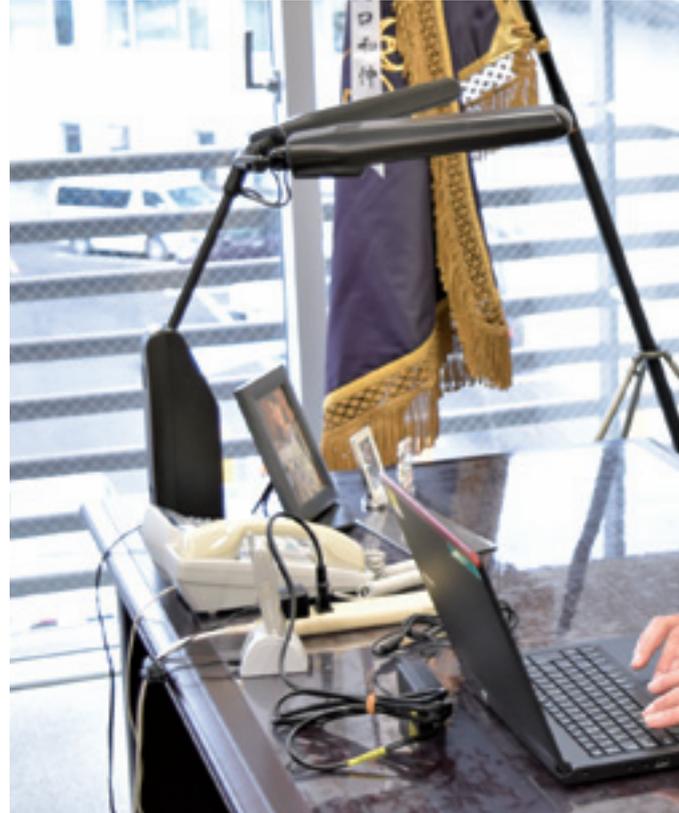
日体大では体操部で徒手体操をやっていました。肩を壊したことで野球を続けるのは難しいと思ったことと、マット運動がうまくできる先生になれたら格好良いだろうと思ったことが理由です。そのイメージに近い種目でしたし、徒手体操なら誰でもできると誘われて入部を決めました。

当時の部員数は200名ほど。練習でとにかくきつかったのは“からジャン”です。先輩の指示で、30分1時間とずっとジャンプを続けるのです。また倒立は、全員の動きが1分間そろって止まるまで終えることができません。一発で決めないとどんどん辛くなってきます。昔の仲間に会うと、当時の厳しい練習の思い出話に花が咲きます。体操は集団で行う内容が多く、チームワークやちょっとした気づかいを学ぶことができましたと思います。

部活動でのさまざまな経験が今の仕事に活かされていることは言うまでもありませんが、特に日体大と共通するのは「一位であり続けるプライド」ではないかと思えます。日体大には常にトップでなければいけない、強くなければいけないという風土があるでしょう。業界トップである資生堂も常勝を求められることは同じです。お客様に売り込むためには商品のことを本当に深く知らなければいけません。恥ずかしながらここの話ですが、男性の私がマスカラやアイラインなどの化粧品を使ってみて、特訓をしたこともあるんですよ(笑)。



瀧口 和伸(たきくち かずのぶ) 1990年、体育学部卒。日体荏原高等学校(現:日本体育大学荏原高等学校)出身。小学校から高校まで野球を続ける。(株)資生堂ウエルネスを経て、2008年に資生堂化粧品の企画・マーケティング・カウンセリング・販売を担う(株)資生堂に入社。茨城県を担当した際には北関東随一と言われる大手ドラッグストアチェーンとの取引を手がけるなど、大きな商談に数多く携わってきた。「美を通じて人々を幸せにする」という企業理念のもと、化粧品の営業マンとして自身の「美」にも気をつかうという。プレッシャーやストレスも多い仕事。週に1回は走るようにしたり、ジムに通ったり、体のメンテナンスをするように心がけているとか。野球も機会があればまたプレーしたいと話す。



## 挨拶、元氣。日体生の強みは、 どんな大学にも負けない

挨拶がきちんとできる。元氣がいい。こうした日体生の強みは社会で高く評価されます。資生堂は超一流の大学から社員が集まっていますが、最終的にものを言うのは、出身校ではなく、人間そのものの価値です。社会に出ると、このことを強く感じます。

粘り強さ、精神的なタフさ、負けたくないという熱い思いは、日体生の中に魂のように宿っています。ぜひ自信と誇りを持ってください。社会という大海原に出て、困難や挫折を逃げずに全力で乗り越えることができるのが日体生であると信じています。自分の夢に向かってぜひ頑張ってほしいと思います。

今、あらためて問われると、教員をやってみたくてという気持ちも残っています。一方で、ビジネス社会に出て良かったと思つことも多々あります。ある意味で、学校は限られた社会でしょう。資生堂はグローバルに展開する企業ですから、世界を見渡さないとビジネスができません。行ったこともない国や地域に海外出張したり、そこでさまざまな経験をしたりして、自分の成長につなげることができます。今、企業は年功序列の枠組みが崩れ、実力主義で評価されるようになっていきます。若くても努力したいでチャンスをつかむことができますし、それを弾みに自分の可能性をいろいろな方向に広げることができます。将来の選択においても、自分を見つめ直して、さまざまな方向性を模索してもらいたいです。

オリンピックやパラリンピオンを多数輩出するなど体育・スポーツにおいて超一流であると同時に、スポーツを通じて社会性や人生観などいろいろなことが学べるのも日体大の魅力。経験や知識の引き出しを広げて、新しい自分を見つけてください。

# 退所後も気軽に遊びに来てもらえる場所になりたい 大好きな子どもたちのために「わが家」を守る

小学校・幼稚園教諭、保育士など、子どもと関わる現場はたくさんある。今、社会のさまざまな要望を受けて、関心が高まっている仕事だ。待機児童や経済的格差などの問題が注目されているが、どのような環境であろうと、すべての子どもには自由にのびのびと暮らし成長していく権利がある。そんな中で、事情を抱える子どもたちと向き合い、支えているOGがいる。難しい仕事であることは当然だが、彼女はあくまで明るくポジティブだ。スポーツと子どもが大好きな日体女子の持ち味がここでも発揮されている。

ソフトボール大会で得たメダルに  
思わず涙が

卓球大会、野球大会、ソフトボール大会、駅伝大会、バーベキュー、ピクニック、キャンプ、盆踊り、ハロウィン、クリスマス…。これらは当学園で行われている年間行事の一部です。ボランティアや地域の方々のご協力をいただきながら運営し、毎回大いに盛り上がっています。中でも私は、県内の施設対抗のソフトボール大会に向け、現在コーチとして子どもたちの練習を見ています。日体大卒業の経歴からか、入職1年目にコーチの声がかかり、来年は監督をやらないかという話もいただきました。今年の大会では銅メダル(3位)を獲得。大会の期間に私の誕生日がちょうど重なり、「いい誕生日プレゼントだね」と言われて、思わず泣きそうになりました。入職2年目。まだまだ戸惑うことが多いですが、だんだんと子どもたちとの距離が縮まっているのを実感しています。

児童養護施設である当学園には、2歳から高校3年生までの子どもたちが入所しています。10人ほど



## 活躍する OG 社会福祉法人 心泉学園 岡野 真希氏 INTERVIEW



のユニット(部屋)に分かれて生活し、私たち職員はそれぞれ担当のユニットを持ち、子どもたちの世話をするのが仕事です。家事業務は、掃除や洗濯、買い物や食事づくりなど、いわばお母さん、お姉さん代わり。私のユニットには、小学校5年生から高校3年生までの子どもがいますが、一方は甘えたい盛り、面倒を見てあげないと自分のことが自分でできない、一方は私と5歳ほどしか離れていない友達のような存在で、それぞれに応じて接し方を変えなければいけません。時にはきつい言葉を投げかけてくる子どももいます。ただ、年代は違っても誰かにそばにいてほしい気持ちには同じだと思います。そんな寂しさを感じさせないように、なるべく家庭にいるような環境の中で生活してもらえるように、自然体で接するように努めています。

幼稚園教諭や保育士といった子どもと関わるほかの仕事と違うのは、やはり日々の生活をともにしていることでしょうか。毎日、長い時間子どもと近い距離で接することは、楽しい反面、緊張を保ち続けなければいけないプレッシャーもあります。やりがいには子どもの成長を目の当たりにできること。これは、子どもと短い

期間しか接することができない仕事では実感することができないでしょう。まだ2年目ですが、長く続けてこそ大きなやりがいを得ることができるとは思いません。かと思えば、経験を積んでいくことを楽しみにしています。

## 子どもが好き

### 自然な気持ちで今の仕事へ

私は、物事をポジティブに捉えるタイプだと思えます。もちろん悩んだり辛く感じたりすることもありますが、なるべく自然体で向き合っていました。

日体大を選んだのはスポーツが好きだったから。小学校からミニバスケットを始め、中学・高校とバスケットボールを続けてきました。怪我もあつて競技は諦め、短大(女子短期大学部)で幼稚園教諭を目指すことにしました。子どもが好きでしたし、中学校で幼稚園での職場体験に参加したこともこの進路を選択した理由でした。

日体大での一番の思い出は、CIA(キャンプ・インストラクター・アカデミー)の活動です。とにかくキャンプ三昧でした。中でも印象的だったのは夏の実習。ピアカウンセラーというリーダーのような立場で参加しました。ほかのメンバーが男子ばかりだったことも。なかなか寝付けないし、朝が早い。そのうえ期間が長い。きつくと感じることもありましたが、日常的に多くの子どもに囲まれて働く今の仕事で、この経験が役立つと思っています。

キャンプでは指導者の立場で参加することが多かったため、細かいことに気を配るようになりました。仕事では行事や活動で引率をする機会が多いですが、子どもの動きのどこを見なければいけないとか、どこが危ないとか、自然と気にする習慣が身についています。

当学園に就職したのは、先生(本多洋実准教授)の勧めでした。幼稚園教諭という夢がありました。大



岡野 真希(おかの まき)日本体育大学女子短期大学部幼児教育保育科から専攻科へ進学。2015年卒。大宮西高等学校出身。勤務先の社会福祉法人 児童養護施設 心泉学園は神奈川県中郡二宮町にある。海が見渡せる恵まれた環境だ。入職2年目で、今はやるべき仕事にとにかく精一杯取り組む日々。小学生1人、中学生4人、高校生1人が生活するユニットを担当する。子どもたちは朝6時半起床、日中はそれぞれの学校に登校して午後に帰宅、夕食、就寝と一日があつという間に過ぎていく。ハードな毎日だが、そこは明るく元気な日体女子。子どもと日体大が大好き。「あのアスリートを見たことあるよ」と子どもたちに話すのが自慢。箱根駅伝の応援も欠かさないと言う。



学でさまざまな経験をする中で、子どもと関わることを軸にしながらも、もつといろいろな可能性を考えてもいいのではないかと考えたのです。肩に力を入れず自然な気持ちで人職を決めました。

## さすが日体生と、よく言われる

日体大というとスポーツマンが集まっている大学、スポーツが好きで元気でハキハキしているというイメージで見られることが多いでしょう。私はその通りかどうかは自信ありませんが、正直、日体大出身ということとで助かっています。「さすが日体生だね」と言われて、期待され過ぎてしまっている面も(笑)。ただとにかく何事にも積極的に取り組むようにしていますから、「動きがいいね」と言っていただけとうれしくなります。

先ほど自然体という話をしましたが、将来について考える時、こだわりも大切ですが、幅広く見ておくということもすごく大事だと思います。子どもと関わる仕事は本当に楽しいです。しかし、現実的な面もきちんと知っておかなければいけません。仕事を始めてから、思い描いていたイメージと違う、職場の雰囲気が違うと悩んで辞めた友人がいたのも事実です。そういう人は、学生時代の実習先の幼稚園や保育所しか見ていない、自分でいろいろ調べていないといった傾向があるようです。幸い私は今の仕事がとても楽しく、恵まれた環境で働いていますが、後輩の皆さんには自分の考えや気持ちをいったんリセットして、積極的にいろいろな志望先を調べてみてほしいと思います。

当学園の理念に「心の故郷」という言葉が掲げられています。児童養護施設は高校を卒業して進学や就職すると退所となりますが、いつでも遊びに来てくれるような環境をつくっていくことが今の目標です。「落ち着ける場所はここなんだよ」と、胸を張って伝えてあげられるように、「おかえり」と迎えてあげられるように、私も職員として成長していきたいと思っています。

## 保健医療学部からの メッセージ



保健医療学部  
救急医療学科

鈴木 健介 助教

1分1秒を争う救急・災害現場。もし専門的な知識があって、救急隊員に引き継ぐまでに適切な対応ができれば、救える命は増えると言います。道行く人が突然倒れたり、事故や災害で、誰でも人命に関わる場面に遭遇する可能性があります。最前線で活躍する鈴木先生に救急・災害医療について紹介していただきます。

私自身、救急、災害医療の現場に携わり、過酷な状況を体験してきました。東日本大震災の際には、大型スーパーの駐車場の倒壊現場で、東京消防庁のハイパーレスキュー隊員とともに26時間救命活動に携わりました。いつ崩れてもおかしくない状況、医療機器もなく一刻を争う現場で、素手で触って脈拍や血圧を判断する医師。高度なトレーニングを要するのが災害医療です。もちろん特殊な状況でなくても、道を歩く人が突然倒れるという場面にもたびたび遭遇しています。そこで痛感するのは、緊急時の対応によって命を救える確率が圧倒的に高まるということです。救急医療学科では、緊急時の対応を中心となって担う救急救命士(国家資格)を育成しています。さらに、広く一般に救急救命の知識を広めていくことも極めて重要な使命だと考えています。アスリート、体育教諭や養護教諭、児童教育を志す皆さんに、一人でも多く関心をもってもらうことが私の願いです。

プロフィール：鈴木 健介(すずき けんすけ) / 国士館大学を卒業し救急救命士免許・養護教諭免許取得後、国士館大学大学院修了、日本医科大学大学院を卒業し、博士(医学)を取得。2007年～日本医科大学多摩永山病院救命救急センターに勤務。2015年～日本体育大学保健医療学部助教。救急救命士 / 博士(医学)。

# 急救命士の挑戦 命を救うために

## Q 救急医療と災害医療の違いはなんでしょう？

救急医療とは、救急車などで急病人や怪我人が病院に運ばれて、救命センターのような施設で緊急の処置を施すことです。それに対して、災害医療は少し状況が違います。緊急性が高い点は同じですが、大地震や災害などの際に、まさに修羅場の現場で対処しなければいけないのです。救急車が来ることができない、病院が壊滅してしまっているなど、厳しい状況が想定されます。そういう中では、例えば心臓が停止している人が重篤なのはもちろんですが、輸送手段が限られていたら、助かる見込みのある人を優先する場合があります。これは「トリアージ」と言われますが、つまり、「災害医療は「一人でも多くの命を救う」という考え方が主になるのです。」

## Q 救急医療学科における災害医療の取り組みとは？

現場重視という点からも、やはり災害ボランティア活動が貴重な経験の場となります。2015年9月に茨城県・栃木県を襲った豪雨・水害の際、学生たちが志願してボランティアに赴きました。また、昨年の熊本地震でも、大学に働きかけ、多くの学生や先生方が合計4回にわたり現地に入りました。土砂が家屋の中に入っていたり建物倒壊したりしている中で、体力のある日体大生の活躍は本当に頼もしく感じました。被災地の方々の役に立つことはもちろんですが、活動から戻った学生の目の色が変わります。また、普段の授業でも、教室を出て寒さの中で実習をするだけでも、現場の臨場感を多少なりとも知ることが出来ます。いわゆるお作法を学ぶのではなく実践を重視しています。



災害ボランティア(地震)  
荷物の搬出



災害ボランティア(地震)  
ブロック塀の処理



災害ボランティア(水害)  
床下の泥の清掃



東日本大震災 大型スーパー駐車場スロープ倒壊現場で  
DMAT隊として活動中

- ・救急救命士は救急現場にかけつけ、適切な処置をしながら医療機関に搬送する役割。
- ・ファーストタッチ（最初の対応）が助かる確率を大きく左右する。
- ・誰でも緊急の場に遭遇する可能性があり、ニーズが高まる知識・技術である。



病院内実習事前指導 救命センターの初療室の再現



病院内実習事前指導 実技評価

## 救急医療学科の活動で 日体大の強みとなることは？

災害ボランティアの際に感じたのは、全国どこへ行っても日体大の卒業生の方々がいらつしやうって力を貸してくださることです。また、保護者会もあります。オール日体大の力を結集して、被災地の方々の方に力になり、なおかつ学生の成長の機会となるような仕組みが確立すれば素晴らしいと思います。「なにか起きたら日体大が助けに行く」というシステムです。日体生は全国から集まっていますから、自分の地元で災害が起きたら力になりたいというモチベーションはすごく高いと思います。きちんと教育をして行けば、迷惑をかけられるお客さんとは一線を画するボランティア活動ができるはずですよ。さらに、スポーツや教育、子どもに関する知見、知名度、これをとつても信頼が厚く、日体大ならではの被災地の方々に安心感を与える活動ができるかと確信しています。

## 緊急時の対応についてもっと教えて

例えば、救急車が到着する前に、名前を聞いたり、いつどこで何をしてどうなったかを聞いて時系列で紙にまとめておく。救急隊も同じことを聞きますから、それがわかっているれば、すぐに病院を探して搬送することができます。できることは限られていますが、小さなことを確実に行うだけでも、命が助かる可能性が高まるのです。

詳しくはこちら「学校における緊急時・災害時の対応」

<http://emergencyfirstaidinschool.com/>



# 社会に伝える救 一人でも多くの

## 救急救命士の活躍の場を 教えてください。

救急救命士というと消防機関の救急隊員というイメージが強いでしょう。そのほか、警察、自衛官、いわゆる海猿（海上保安庁）でもこの資格を持った人が活躍しています。また、企業の危機管理部門、鉄道会社、教員、介護施設、警備会社、百貨店、ホテルやテーマパーク、ライフセイバー、山岳ガイドなど人と接するすべての仕事で活躍の場があります。そのほか、救命講習や応急手当のインストラクターを務め、ファーストレスポンド（最初に対応する人）の知識や技術の向上に貢献しています。救急救命士が活躍することで、1人でも多くの方が助けられています。そのニーズは年々高くなってきています。

## Q

### あらためて救急救命士の使命、挑むべきことは？

救急救命士とは、いわば病院ではない現場で、中心となって緊急時の対応をする専門家です。テレビでは映らないような過酷な現場も普通ですから、病院実習や救急車同乗実習、最前線で活動する人から話を聞く場などを設けて、自覚をもって取り組めるよう教育しています。さらに、学生自身の技量や知識を高めるだけでなく、それを多くの人に伝えていけるような人材を育成したいのです。今、他学部学科からも指導を受けたという学生が来ていますが、大歓迎です。病院ではない現場で、一人でも多くの命を救える仕組みを作りたい。緊急の場面に遭遇した時に、何もできなかった、あるいは自分の技量が足りない人にさせたくない。それが、私の願いであり、これからの使命、挑戦でもあります。

## 学校教職員にも救急救命の知識や技術が必要

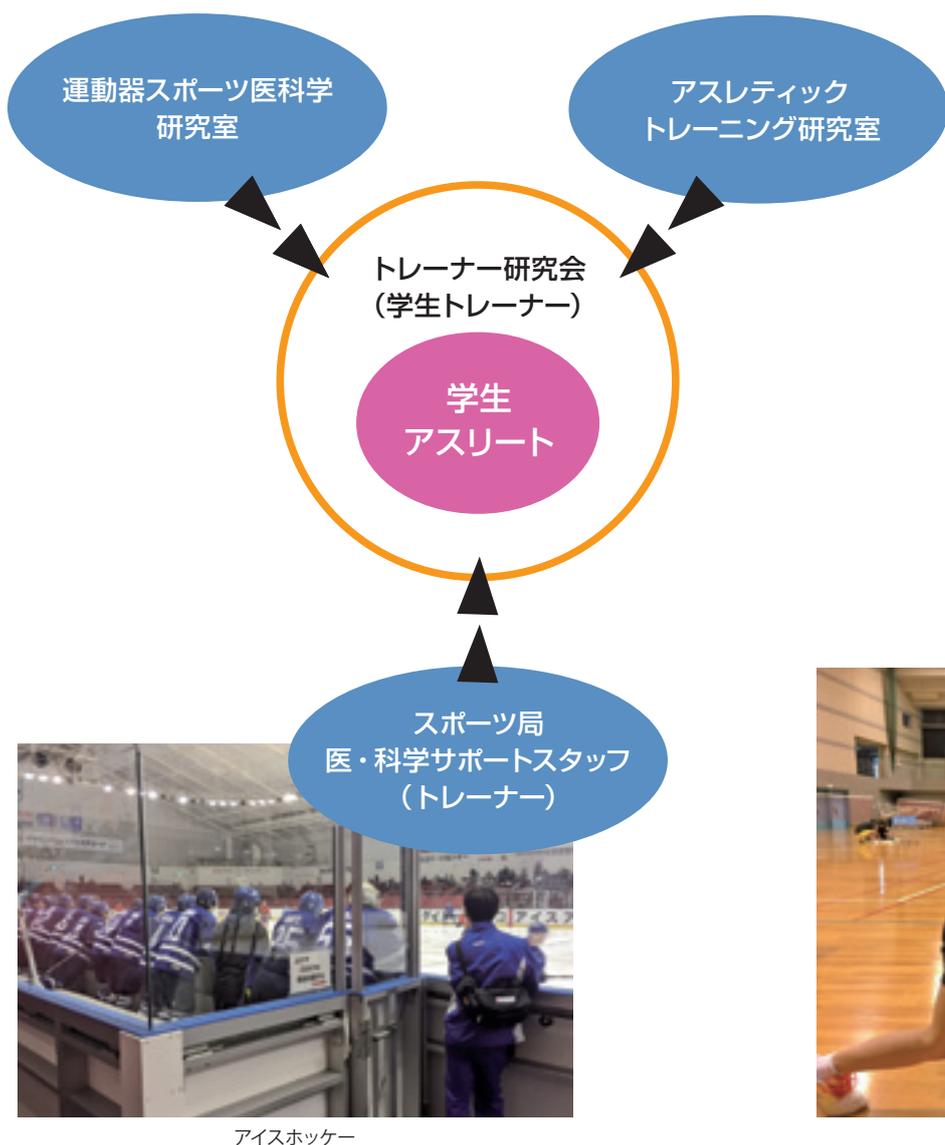
学校にAED（自動体外除細動器）が設置され、教職員が使用できることが当たり前になりました。また、アドレナリン自己注射薬（エピペン®）が自分で打てない子どもがいたら、教員や保育士が注射することが求められています。ここ数年で、3000人以上の学校教職員に緊急時の対応を講習しましたが、現場で非常に役に立ったという声を頂いています。

「日体大アスリートサポートシステム(NASS)」は、オール日体大体制による学生アスリート支援システムであり、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会において「70名の学生及び卒業生をオリンピック・パラリンピアンとして輩出・育成」という中期目標を達成するため他に類を見ないこれまでの日体大の実績や知見を体系化し構築された。

「メディカルサポート」は、体育・スポーツの日体大のブランドが、さらに健康・いのちの領域に広がっていく中で、注目を集めている領域である。単にスポーツ外傷・障害における救急処置や予防にとどまらず、メディカルチェックを定期的の実施することで、再発予防やパフォーマンス分析サポートやトレーニングサポートなど包括的なサポートへとつなげていく入口の役割も担う。メディカルサポートでは、トレーナー研究会の学生トレーナーが日常的に活躍し、その70名を超える会員と、顧問・副顧問・アドバイザー・学生アドバイザーをあわせ、約100名のメンバーで構成。日々アスリートを支えるとともに、学生トレーナーの育成・教育の場となっていることも特徴だ。前身のテーピング研究会から数え40年以上の歴史を持つトレーナー研究会のノウハウも活かされている。

日体大の競技力を支えてきたこれまでの取り組みが、NASSのメディカルサポートとしてどのように変化・進化しているのかを見ていきたい。

# 点ではなく連続的・包括的なサポートが強み メディカルサポート



サッカー



野球



バドミントン

## アスリート支援に加えて 学生の教育の場としての役割

日体生の中には、将来アスリートをサポートする専門家を志す者も多い。数多い専門家の中で、アスリートと接する時間が長く、最も身近な存在なのがアスレティックトレーナーである。

現場の監督やコーチにとって、アスリートのケガは最も悩ましい問題である。アスレティックトレーナーは、スポーツ外傷・障害の予防、スポーツ現場における救急処置、アスレティックリハビリテーション、コンディショニング、検査測定と評価、健康管理と組織運営、教育的指導について高度な知識と技能を備え、スポーツドクター及びコーチとの緊密な連携のもとに競技者の競技活動を支える役割を担うとされる。

現在、トレーナー研究会の学生トレーナーは、学内現場においては東京・世田谷、横浜・健志台の両キャンパススポーツトレーニングセンター併設のATルームと14の運動部(男女別では19)での活動と、学外現場での活動を展開している。NASSメディカルサポートで、特に学生トレーナーに期待されるのはコンディショニング、スポーツ外傷・障害の予防、アスレティックリハビリテーションなどのアスレティックトレーニングサポートである。

学生トレーナーが日常的にサポートすることにより、日々刻々と変化するコンディショニング、アスリートの身体的特徴、スポーツ外傷・障害発生メカニズム、競技特性に応じたコンディショニングの課題などを他の専門スタッフとの連携・協力を実学で学び経験できる。これは、将来トレーナーを志す学生はもろろんのこと、学生支援といった観点からも有意義なことである。メディカルサポートとして、学生トレーナーには日常のサポートから得たパフォーマンス、トレーニング、メディカルなどの情報をNASSスタッフと連携するスポーツ現場との仲介役の役割が期待されている。



チアリーダー



野球



トレーナー研究会

## メディカルチェックにより 包括的なサポートが可能に

NASSのメディカルサポートでは、サポートを開始する前に、アスリートはメディカルチェックを必ず受けることになる。アスリートの特徴を知るためには、メディカルチェック、フィットネスチェック(体力測定)、スキル(技術)チェックの3つが必要となってくる。それらの結果から、目標とするパフォーマンスが発揮できなかった場合、どこか痛めていないか、筋力は問題ないか、技術そのものはどうなのか、などと問題点が明らかになり、リハビリを施したり、あるいはNASSのパフォーマンス分析サポートやトレーニングサポートと連携し、実効性の高いサポートを提供することができ。

さらには、メディカルチェックでの関節可動域や筋のタイトネステストなどから競技別の身体的特徴が明らかとなるが、部位別で見た際、例えば肩に焦点を当てると、野球、ハンドボール、水球、バドミントンなど異なる種目の肩について横断的に検証することが可能となる。このことは、パフォーマンスの向上や外傷・障害の予防に向け、種目を超えた包括的なトレーニングやリハビリなどの提案が可能となる。

NASSの組織的な活動により、メディカルチェックによつて豊富なデータが蓄積され、サポートを受けるアスリートに的確なアドバイスができるようになる。

発見された問題によつては、スポーツドクターの指示を仰ぎ、医療機関を紹介する。スポーツドクターをメディカルの頂点に、専門性を備えた複数のアスレティックトレーナーが現場で活動を行うのが理想的な形である。その点ではまだまだ人材が不足しているが、そこで学生トレーナーが現場において大きな役割を担うことになる。

オリンピック選手やプロ選手などを含むトップアスリートの指導経験豊富なアドバイザースタッフを配しているが、学生トレーナーの活動を補完する意味でもメディカルチェックは重要である。

## 日体大、NASSだからこそできる 腰を据えた「線」のサポート

NASSの医科学サポート(パフォーマンス分析サポート、トレーニングサポート、メディカルサポート、心理サポート、栄養サポート)は、学友会クラブからの要望をもとにプログラムの提供やプロジェクトの構築が行われる。メディカルサポートにおいても、教員が各部の部長・監督・コーチの要望を聞き、その指導のもと学生トレーナーが現場に赴く。

この活動が学生にとって実践の場となっていることは前述したが、練習や合宿、試合など、極端に言えばほぼ365日帯同していることになる。つまり、要望があつた時にだけ動く単発のサポートではなく、いわば連続的な「線」のサポートを実現している。これは学生トレーナーの学びとして有用なことはもろろんのこと、アスリートにとつても付加価値を提供できる。日常的にサポートすることはアスリートの日々刻々と変化するコンディショニングを時系列的に変化で捉えることができ、特にスポーツ障害の予防に役立てることができ。アスリートと距離が近い日体大、NASSならではの強みと言つて過言ではないだろう。

NASSがオリンピック選手・パラリンピック選手育成を使命の一つとする以上、JISS(国立スポーツ科学センター)との連携も不可欠だ。立場は異なるが、基本的にはJISSが提供する強化選手に対する「点」のサポートであると言える。一方で、日体大やNASSは大学の立場で選手の状態や成長を継続的に観察することができる。この点で、競技力向上や選手育成において新たな視点でさまざまな提言が期待されるのではないかと考える。

NASSは、学内の専門家がチームとなり包括的にアスリートをサポートする「学生支援システム」である。学生スタッフが主体的に参加しているメディカルサポートは今後の展開のモデルの一つになるかもしれない。



## 125周年記念事業第2回ホームカミングデー懇親会を開催しました

平成28年11月6日(日)に125周年記念事業の一環として、第2回ホームカミングデー懇親会を開催しました。卒業生やそのご家族約150人にご参加いただき、同級生と思い出話に花をさかせたり、現役学生から現在の日体大の話や聞くなど、世代を超えた会話の輪が会場のおちろちろで広がりました。フリーアナウンサーの川村綾さん(2001年体育学部卒)が司会を務め、オリンピックである森末慎二さん、大東忠司准教授、小関也朱篤選手、藤森太将選手から競技やオリンピックについての興味深いお話を伺うことができました。

懇親会の結びには参加者全員で校歌を斉唱し「オール日体」としての一体感が生まれ、第2回ホームカミングデー懇親会は盛会のうちにひらきとなりました。



## リオデジャネイロ2016祝賀会が盛大に開催されました

リオデジャネイロで開催された第31回オリンピック競技大会・リオ2016/パラリンピック競技大会にて本学関係者が大活躍し、好成績を収めることができたことに対し、11月23日(水)帝国ホテル東京「孔雀の間」において祝賀会が開催されました。当日は、法人・大学関係、外部支援者、オリンピック・パラリンピック出場選手/コーチ/関係者、日本体育大学校友会陸上競技部(駅伝ブロック)、応援団部、チアリーダー部、プラスバンド部、日本体育大学柏高等学校吹奏楽部の総勢1,300名の方々にご出席いただき、祝賀会の中では、選手・コーチ関係者の紹介や記念品の贈呈等が行われました。

又、年始に行われる第93回東京箱根間往復大学駅伝競走の好成績を祈念し、校友会陸上競技部(駅伝ブロック)の選手に向けて応援団、チアリーダー部、プラスバンド部によるエールが贈られました。



## 平成28年度 第2回留学生交流会(日体ファミリー)が開催されました

平成28年11月25日(金)、日本体育大学・日体大荏原高等学校・日体大柏高等学校に在籍する留学生38名の交流会が、日本体育大学 東京・世田谷キャンパスにおいて実施されました。

世界15カ国から集まった留学生の他、大学関係者、高等学校関係者が参加し会の冒頭、学校法人日本体育大学松浪健四郎理事長より留学生へ挨拶を賜り、「日本の教育、文化を学び取って欲しい。日本と君たちの母国の架け橋になり、スポーツを通して世界を平和にしましょう」というお言葉を頂戴しました。国際交流センター荒木達雄センター長の司会進行のもと、5グループに分かれ、日本での問題点(学校や生活面)、部活動等での悩みや将来の目標などのディスカッションを行いました。昨年度の会の冒頭では、日本語能力の問題により発言が少なくコミュニケーションを図りづらかった面がありましたが、今年は序盤から白熱したディスカッションが展開されました。各留学生の努力の成果が、彼らと会話をする事ですぐに理解する事ができ大変有意義な交流会となりました。



## JICAボランティア平成28年度第三次隊派遣前訓練修了式において、法人・大学・設置校関係者22名が出席致しました

平成28年12月14日(水)、JICAボランティア平成28年度第三次隊派遣前訓練修了式が長野県駒ヶ根市にある独立行政法人国際協力機構 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所において実施されました。

平成28年度第三次隊として各国に派遣される約70日間に渡る訓練を終えた新隊員123名(男性56名、女性67名)、他JICA関係者、来賓、新隊員の家族等が参加し盛大に行われました。来賓として招待された学校法人日本体育大学松浪健四郎理事長より新隊員の方々へ「世界の常識は、日本の非常識」など、日本の国技である「相撲」と「イスラム教」を事例に出し、これから派遣される隊員へ激励ならびに祝辞が送られました。今般は、残念ながら新隊員として訓練を受けた本学の卒業生はおりませんでしたが、松浪健四郎理事長他本学関係者より激励がなされました。



## 第93回東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝) 総合7位 6区秋山は2年連続区間新!

平成29年1月2日(月)・3日(火)に行われた第93回東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)において、日本体育大学は往路13位、復路3位、総合7位の成績を収め、シード権を獲得いたしました。

第93回箱根駅伝では、関東学連加盟大学のうち、前年大会でシード権を獲得した10校と、予選会を通過した10校に関東学生連合(オープン参加)の合計21チームが出場し、東京都千代田区大手町・読売新聞旧東京本社前から、鶴見、戸塚、平塚、小田原の各中継所を経て神奈川県足柄下郡箱根町・芦ノ湖までの往復(往路107.5km、復路109.6km、計217.1km)を走りました。

昨年度に引き続き、無事シード権を獲得し来年度の箱根駅伝の出場が決定いたしました。また6区を走行いたしました秋山清仁(体育学科4年)におきましては、自らの区間記録を8秒上回る58分1秒で2年連続区間新記録を更新いたしました。